

兵庫縣佐用郡久崎の蝶(1)

並に本県未記録の数種について

山 本 廣 一

緒 言

佐用郡下の蝶に関しては、既に井口宗平氏が精しい調査をなされている。氏はその結果を屢「昆虫世界」に発表され、又最近には本誌第四号に「佐用郡産蝶類及び天蛾類の採集録」と題して精細な記録を寄せられているので、吾々はそれによつて、同地方に於ける蝶の種類や分布の大様を知ることが出来ると思う。従つて筆者が今回殊更に氏の御住所でもある「久崎」の蝶などに就て書こうとすることは、全くおこがましい極みであると思つている。しかし、久崎は筆者にとつて、過去に於て、否現在にあつても、特に関係深い採集地の一つで、筆者はこの地を六甲附近や但馬西部の山岳地帯に比較して、決して劣ることのない興味ある県下有数の採集地であると信じている。唯、それが偏境の土地であるがために、一般からは余りに注目されず、今日に至つたことは甚だ遺憾である。従来筆者は主として蝶に関心を払つて来たのではあるが、それのみについて見ても、相当珍種が多く、その中には幾つかの本県よりの未記録種が含まれている。故にこれらを記録すると共に、この地を世に紹介して各方面よりの協力を得、更に昆虫分布の相を明らかにすることは、筆者の最も希望するところであり、敢て一文を草する所以である。

又老婆心までではあるが、先般井口氏の“葉”中に述べられた種名の中には、現在一般に使用されて居らぬものや、同名異種のものがあつて、現在の名称よりすれば、多少紛らわしい節もあるので、この際それらを補つておくことが今後の調査の上に便利だとも考えるからである。

要するに、今後本県西部諸地域の昆虫相が益々明らかとなることを望むと共に、その基礎を拓かれた井口氏に深い感謝と敬意を表する次第である。そしてこれが筆者にとつて過去幾年間この方面に於ける採集品の整理の一機会ともなることを、喜ぶものである。

筆者と久崎町

曾て井口氏は久崎のモンキアゲハについて発表されたことがある(昆虫世界第十巻、1905)。筆者はそれによつて、相当以前から久崎の名を承知していた。しかし、この地に初めて採集を試みたのは1933年で、以来興味ある採集地と毎年この地を訪れて来たのである。尤も戦争の末期から終戦の暫くの間は、交通機関の制

限や、種々の混乱のために、一時中止の状態となつていたこともあるが、最近はや以前にも増して足繁く出かけているので、最初からすれば採集も相当の回数によることだろう。

扱て、筆者が久崎を有望な採集地と目するに至つた動機については、多少脱線のきらいがあるが、往時を回想する意味に於て、少々述べて見たいと思う。

1930年10月26日神戸港外に特別大演習観艦式の盛典が挙行せられ、陸奥・加賀等の艦艇160余隻が集結した。そして神戸裏山の一帯は、遠近各地より馳せ参する拝観者の人々によつて埋められたのであるが、筆者は小林桂助氏の御厚意にあまえて、その前日より六甲の御邸をお訪し、当日の壮儀は勿論、夜の壮観をも心ゆくまで望み得て、深い感銘を与えられた。その節小林氏の珍しい鳥類や昆虫のコレクションを拝見することが出来たが、その中特に印象づけられたものの一つはウラツロミドリシジミが久崎に産するというものであつた。その頃本種は非常に珍らしく、大阪府下能勢に産することが知られていたもので、筆者も同地を屢々尋ねて、之を索めたが、常に多くを得られず残念に思つていた折であり、何とかして久崎への遠征を実行したく思つたのである。

地図上に見る久崎町は広い。しかもこうした未知の地に、甚だ分布の局限され、個体数も少いと思われる蝶を索めることは極めて困難なことである。1933年、曾て小林氏が上郡よりバスを利用して、久崎にて下車されたとお話を唯一の手がかりとして、種々の想像を廻らしながら、漸く陸地測量部の地図上に一つの採集コースを決定した。そして、ミドリシジミ類の発生最盛期なる6月中旬の日曜を選んで、いよいよ久崎入りとなつたわけである。たしか当日は午後に至つて、風も稍々加わり、雲量も増して、少々天候の氣遣われる状態となつたが、予想は見事の申して、目指すウラツロミドリシジミは勿論、意外にも本県よりは知られない(現在も未報告である)ウスイロオナガシジミさえ、かなり採集することが出来た。次で第二回目の採集を翌年五月に行い、珍らしいオナガサチエ(*Onychogomphus viridicostus* Oguma)の雄を得。ますます久崎の魅力は嵩まり、遂に今日にまで採集を継続するに至つた。扱て最初に選んだ地は僅か数百米に足らぬ小川に沿つた谷間であつたが、そこは曾ての

名和昆虫研究所の採集人高見筆太郎氏が絶えず往復して、盛んに採集していた場所であつたことが、その後度々の訪問によつて道行く里人の話から承知出来た。そしてそれが又先に小林氏がウラシロミドリシジミを採集された谷なのでもあつた。僅か一葉の地図を介して最適の個所が一致したということは單なる偶然でもないと非常に愉快に思つている。

久崎町の概観

久崎は佐用郡中最も南西の位置にあつて、北は同郡西庄村に、南は赤穂郡赤松村に連なり、西は岡山県英田郡土居町(美作及び和氣郡三国村(備前)に接する。東西に長く、長さ約11軒南北3~5軒、面積凡そ37.2平方方に及んでいる。大部分は山地で、殊に西域は山勢急峻、従つて県境近い大日山、向坂の部落では山越しに中樞久崎に出るよりは、寧ろ隣村西庄を迂回して到る方が容易であり、反つて道もそうした方面に立派なのが開かれている。一帯に針葉樹に富み、殊に県境には種類も多く、昆虫の豊かなことを想像させられる。今仮りに上郡よりバスを利用して、千種川沿いに遡るならば、赤松村を終る頃より、松樹は次第に減少して、針葉樹林となり、久崎部落の裏山は殆んどがカシワ樹林となつていることに注目される。

川には千種川の本流の他に佐用、秋里、大日山の三支流がある。北の方平岡町の辺より発した佐用川は、円光寺(久崎町)の辺にて、県境近い南西の山間の水を集めて来る秋里川を合せ、南に進んで更に、東北より来る千種川の本流に合し、南の方上郡に向つて南下する。大日山川は県境近く、大日山(久崎町)小日山(西庄村)大島等の部落を連ねて北上し佐用川に注いでいる。

町の中心久崎部落は佐用・千種の合流点に発達した町で、上郡・佐用間の一要衝に当り、佐用、智頭・大原(鳥取県)、津山(岡山県)方面のバスは何れもここを通過している。

久崎町には千種の本流に沿う家内・久崎・櫛田の部落を初め、佐用川には円光寺、秋里川には上・下秋里、その最も上流赤松村(赤穂郡)に近く西新宿の部落があり、西部の山間大日山川の上流に大日山の村落がある。

主要な道路は何れも河川に沿つて発達して居り、久崎より本流に從えば櫛田を経て徳久村に至る。この辺開けて水田を連ね、左方佐用町との境に高倉山(標高約350米)があり、右方滝谷のつまる所に飛龍滝がある。滝は一名櫛田滝といい、直下5丈、巾4尺、景勝の地とされている(太田氏・帝國地名辞典)。又佐用川に從えば円光寺の北西上月(西庄村)にて道は二又し、一は佐用町に、一は姫新線に沿つて西に折れ、西大島

を経て岡山県土居に通じる。上月は往時山中鹿之助幸盛が抛城のあつたところ、現在の上月駅の所在地、山陽線上郡駅と共に久崎町への入口をなしている。

特筆すべき久崎の蝶

久崎の蝶には変つた種類が多い。ウスイロオナガシジミやホシチャバネセセリがいる。後者は極めて稀だが、前者では必ずしも少いとは言えない。ウスイロオナガシジミは但馬西部にも居るが、個体数は甚だ少く、筆者は僅かに一頭を獲たにすぎないし、ホシチャバネセセリは従来中部山岳地帯の採集に時折出遭つたという程度で、何れも珍らしいものである。本県より採集された記録もなく、本年6月大日山辺で得たアサマイチモンジと共に、本県最初の記録をなすものである。前に述べたウラシロミドリシジミとサマダラモドキとは県内この地以外に採集されたこともなく、報告にも接しない。寧ろ近県にも珍らしいものである。又最近の記録によるとキマダラルリツバメが二頭も既に高見氏によつて採集されている。一時採集家の話題を賑わしたシルグイヤシジミは中原和郎博士が井口氏の採集品について新たに命名されたもので、その基産地は勿論久崎であつた。

今後更に意外な種類が発見されることと思う。例えば現在筆者の手許にある *Favonicus* の一種は恐らくその一つとなりそうに思う。目下の処個体数が少い為、今少しく標本を得た上で発表しようと考えている。

現在裏神戸の山地帯のように、ギフチヨウ、ホシミスツ、クボウラミスツ、ウラキンシジミはまだ知られていないが、或る程度の可能性が濃く、確か六甲辺に比肩すべき、否それ以上に有望な土地である。

採集地の其後

筆者が最初久崎を伺れた頃に比べると、採集地の様相も余程變つてきた。道路の改修は著しい。西部の地域のように樹相の余り変らぬ所もあるが、クヌギ、カシワ等雑木の多い地域では、絶えず薪炭の原料として伐採するので次第に変化する。従つて採集の調子も屢々見當が狂つて来る。殊に初めて這入つた「久崎の谷」の移りは甚だしい。巾広の板がわたされていた谷入口の橋は、度々變つて(水害もあつたであろう)、今ではしつかりとした土橋となり、橋を渡つて漸く徒歩で進み得た谷川沿いの小径は、新たに車さえ通する道となり、遠く山腹を迂回したため往来も容易となつた。當時は谷奥に梅の樹林があつて、そこへは瓜先上りの小径があつたと記憶するが、今はそうした跡もない。屈曲の多い大釜部落への径は、恐らく樵夫や草刈だけの往復するのだろうか、草に覆われて、漸く昔の面影を残している。曾てホシチャバネセセリを採集したのも

この小径である。比較的平坦なところにあつて採集の容易だつた溝葉樹林は殆んど無く、手頃の高さだつた山腹の樹木は著しく成長して、繁茂する下草と、急な斜面との為に、ややともすれば足を奪われて、採集は次第に困難となつている。曾てミドリシジミやアカシジミの類を多量に採集出来たのも、一は比較的容易によりつける樹林が存したためでもある。初めてウスイロオナガシジミを見つけ出した杉の林（附近一帯にカシワ樹があり、シジミは下草に休んでいた。現在も附近のカシワ樹林に居る。）はずつかり伐り払われ、雑木の貯積場となつている。しかし、たとえ寄りつきにくくとも、両側の山の斜面が一面の緑樹に包まれていることは何よりも喜ばしい次第である。

昆虫の種類と個体とが減少してきたことは注意せね

ばならない。スジボソヤマキチヨウやスミナガシはここ両三年採集出来ないし、所によつてはサカハチチヨウも非常に少なくなつた。殊に本年は天候の加減か、度々の採集にも拘らず獲物は殆んど取るに足らない有様である。ウラジロミドリシジミは尙相當に産するが、他のシジミ類は急に減少したし、是非共慙しいと察めている Favonius sp. は遂に得られなかつた。六甲山麓のクボウラミスジヤ、元の県立三中附近のウラキンシジミのような悲しい運命を辿ることのないように念願してやまない。

採集コース

従来筆者がよく訪れたのは (1)久崎——大釜 (2)滝谷 (3)秋里川流域、長野滝 (4)大日山川。

昆虫の趨光性 (螢光燈と昆虫) (1)

田 口 勝 夫

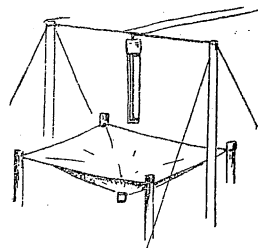
夜間活動性の昆虫、特に蛾類の趨光性を利用し、誘蛾燈を使用して、その日週変化を調査した記録は非常に多い。又、近年各地に普及した螢光誘蛾燈を使用しての昆虫採集や、來集昆虫の季節的変化の調査等、盛に行はれているが、野外で螢光燈に來集する昆虫を採集し、それを時間的に調査し、それに気象条件を結びつけて考えようとするとき、日々変化する昆虫相や刻々変化する気象条件を相手に如何に多くの記録を積みあげたところで、その記録と記録を結びつけ、即ち意味づけして、昆虫の趨光性を規定する因子や、その昆虫の特性について結論する事は殆ど不可能である。と云つて、野外の研究をなおざりにしたのは、研究の端緒も見出せなくなつてしまふ。

こゝに私が神戸市立妙法寺小学校自然教育学習園で行つた、夜間採集の結果を記し、皆様御叱正を、御願ひする次第であります。猶、この研究にあたり、便宜を計つて下さつた神戸市立妙法寺小学校長竹井石太郎先生その他同校職員に対し深く感謝の意を捧げます。

1. 採集方法

日没前、昆虫が燈火に飛来しない頃より螢光燈をつけ、夜が明け、虫が全く来なくなるまで來集する昆虫を採集する。來集した昆虫を採集するには、図の如く螢光燈の下に3m²の白布をうけ、布の中央に2cm²程の穴をあけ、その下に広口ビンをとる。來集して布の上に落ちた虫を、ホウキでその穴からビンの中

へ、はき込むのである。ビンの中には氷醋酸又は、氷醋酸とエーテルの等量溶液が少量入れてあり、中へ落ちた虫が死ぬよになつている。殺虫剤としては、青酸カリやホルマリンを使用するよりも、ずつと成績がよい。ただ、蛾類では、翅がぬれたり、中で甲虫類があばれたりして後に分類するのに非常に困ると云ふ難点がある。



來集して螢光燈のまわりを飛翔している昆虫は、捕虫網ですくい、ビンの中に入れる。採集した虫は時間的に調査するため、ビンは半時間毎に新しいのとりかえる。このような方法で採集するので、勿論一人で行う事は出来ないが、來集した昆虫を殆ど一匹残らず採集する事が出来る。使用した誘蛾燈は、マツダ誘蛾燈 FV-240B型のもので、周波数60 \sim 、電源電圧60-110V、消費電力30Wのものである。

2. 來集狀況

昆虫の來集狀況について、数多い夜間採集の結果の中から、8月、9月、10月、11月 (1950年) の各月代表的なものを、それぞれ一つづつ都合4回の夜間採集を記すと、次の如くである。